

コンステレーションと出会い

ー長新太『ブタヤマさんの絵本』の心理学的考察ー

Constellation and Encounter

心理学科 今西 徹

要約：『ブタヤマさんの絵本』を題材に、コンステレーションと出会いについて、心理療法の視点から考察した。世界や自己と出会うためには、自身の欲望を投影する他者が必要であり、二人いることによって原初的な欲望との出会い、世界および自己との出会いがコンステレートされる。しかし、一人で世界と対峙し、世界と出会うということも同様に重要と考えられ、『ブタヤマさんの絵本』をシリーズでみると、そのことが浮かび上がってくると考えられた。

キーワード：コンステレーション、出会い、欲望、心理療法

1 はじめに

1992年の京都大学定年退職記念講演において河合隼雄は、「コンステレーション」をテーマに取り上げた（河合，1993）。コンステレーションとは星座のことであるが、ここではユングが用いた概念として紹介された。そして、このコンステレーションを非常によく示してくれている例として、長新太の絵本、『ブタヤマさんたらブタヤマさん』（1986）を紹介している。

『ブタヤマさんたらブタヤマさん』はなかなか個性の強い絵本である。ブタともチョビ髭を生やしたおじさんとも、なんとも形容しがたい奇妙なキャラクターが、虫取り網を手にひたすらチョウを追いかけている。「ブタヤマさんはチョウをとるのにむちゅうです うしろからなにがきてもわかりません」（p. 2）。そこへ、「ヒュードロドロドロ ブタヤマさんたらブタヤマさん うしろをみてよ ブタヤマさん」（p. 4）と、三つ目のお化けがブタヤマさんの背後すぐに迫ってくる。そうして次々と、巨大な鳥やらセミやらネズミやらバッタやらが、ブタヤマさんの背後に迫ってくるのだが、ブタヤマさんはチョウに夢中でまったく気づかない。ついに、「なあに どうしたの なにかごよう」（p. 14）とブタヤマさんは振り返るのだが、そのときには後ろには何もいない。そうしてまたブタヤマさんはチョウを追いかけて、背後に巨大な化け物が迫っていても気づかない。再び「なあに どうしたの なにかごよう」（p. 28）とブタヤマさんは言うのだが、やはり後ろには何もいない。「かぜが そよそよとふいているのです」（p. 28）と、ここで絵本はおしまいになる。

河合（1993）は、コンステレーションを見るということは、いいときに後ろを見ないとだめだと述べている。また、背後から来るものの気配をさるということも、コンステレーションを読むことに大いに関係しているのではないかと、とも言っている。

星座というものは、本来バラバラでそれぞれ何の関連もない星どうしの間につながりを

見出し、そこにひとつのまとまった形を浮かび上がらせ、それにまつわる神話を紡ぎ出すことで成り立っている。コンステレーションを見る、読むということは、それとまったく同じように、バラバラで脈絡がないように見える事象どうしの間につながりを見出し、ひとつのまとまった形、さらには物語を浮かび上がらせることである。それが一連の印象深い事象、出来事が生じたときに「何がコンステレートしているのか」という問いを立て、コンステレーションを見る、読むという行為なのである。

その際に、「いいときに後ろを見る」、「背後から来るものの気配をさとり」ことが重要となるというのは、一体どういうことであろうか。読むという行為と背後から来るものの気配をさとりということは、常識的には結びつかない。河合の講演においてはこの前に紹介された事例の効果もあってか、なんとなくわかったような気にさせられるが、改めて振り返ってみると、やはり非常に難解な考えを含んでいることに気づかされる。しかし、ここには非常に興味深いこと、重要なことが示唆されているように感じられる。それがどういうことであるのか、自分なりに考察して展開してみたいと思ったのが、本論文を執筆した動機のひとつである。

ところで、ブタヤマさんが登場する長新太の絵本は、実はこれ以外に出版年順に、『キャベツくん』(1980)、『キャベツくんとブタヤマさん』(1990)、『キャベツくんのにちようび』(1992)、『つきよのキャベツくん』(2003)と合計5作品あり、本論文ではこの一連の絵本作品群を仮に『ブタヤマさんの絵本』と呼ぶことにする(あるいは『キャベツくんの絵本』なのかもしれないが)。

この絵本作品群において、『ブタヤマさんたらブタヤマさん』は2作目に位置する。そして、それぞれのお話を並べてみると、シリーズのなかでこの作品が異色のものであることがわかる。つまり、これ以外の4作品においては、キャベツくんとブタヤマさんという二人(?)のキャラクターが登場し、ブタヤマさんの、キャベツくんを食べたいという欲望を核としてお話が展開するという共通点が存在するのである。ブタヤマさんが一人で登場して、一人でひたすらチョウを追いかけているというお話の構成は、『ブタヤマさんたらブタヤマさん』のみに見られるのである。

このように全作品を見てみると、また新たに見えてくるものがあるように思える。一連のお話は連続性があり、異色の『ブタヤマさんたらブタヤマさん』を含め、全作品の底を流れるテーマがあるように思われるのである。それは、「世界と出会うこと」とでも言えようか。子どものように原初的な心が、世界と出会うときの様が見事に描かれていると考える。そこにブタヤマさんという大人の要素を持つキャラクターが入ることによって、世界がより色彩豊かに生き生きとした動きを持ってその姿を表してくる。大人としての意識がこのような原初的で本来的な仕方世界と出会うとき、それは真の意味で「自己と出会うこと」にもつながるのではないか。

また、世界の現れ方というものは、そこに存在する我々の心を反映したものでもあることを、全作品を通して表現していると考えられる。いわゆる現実というものは、我々の心がその都度創造しているものであることを、我々は忘れてしまっているが、『ブタヤマさんの絵本』

はそのことを直観的に思い出させてくれる絵本でもあると思われる。コンステレーションを読むというとき、我々の内的世界および外的世界のすべてを含めた全体的状況を見ようとするのであるが、その際、内的世界も外的世界も入り混じったものであることが実感されることになる。この絵本はシリーズを通して、コンステレーションということを直接的に表現して見せてくれるのである。

ここで、心理療法ということにひきつけて考えてみると、また興味深いことが見えてくるように思われる。心理療法において、原初的な心のありようということが重要な要素になることは当然である。そのうえで、キャベツくんとブタヤマさんの関係性を心理療法の関係性の視点から捉え、お話のなかで展開することを心理療法において生じることとして見てみると、さらに興味深いことが見えてくるように思われる。そもそもコンステレーションを読むことも、心理療法においてこそ重要となってくることである。そこで、本論文では心理療法の視点からお話を読んでいき、新たな知見をもたらすことを試みたい。その際のキーワードとなるのが、コンステレーション、そして世界や自己との「出会い」となろう。

心理療法で取り組まれるクライアントの問題とは、大きく言えば世界の捉え方の問題であり、そこで生じる苦しみが耐えがたいためにクライアントは来談すると言える。そうすると、心理療法の目的とは、世界を新しく捉え直すこと、世界と新たに出会っていくこと、そのことを通して真の自己と出会っていくことと表現できよう。心理療法においていかにクライアントとセラピストが世界と出会っていくのか、そのような出会いを実現するためにセラピストが、コンステレーションを読むことを含めどのような役割を果たしていくのか。そのようなことを考えるための豊かなヒントを『ブタヤマさんの絵本』は与えてくれると思われる。

2 気配を読むこと

『ブタヤマさんたらブタヤマさん』において、ブタヤマさんは目の前のチョウを追いかけている。それにしても、背後から迫っているものの迫力からすると、その気配をまったく感じないというのは、異常ですらあるように見える。そのギャップがこの絵本のおもしろさであり、不気味さでもあろう。「こんなことになっているのに、ブタヤマさん何も感じないの？」と、読む側は心を動かされるのではないか。

ブタヤマさんはチョウという目の前の目に見えるものにあまりにとらわれてしまっているために、背後からの気配に気づかないのだと考えられる。河合との対談(鶴見・河合, 1990)において鶴見は、実証主義は見えるものだけを分析して、見えないものについては言わないことになっていて、気配などということはないことになってしまうのが近代文明の問題である、といったことを述べている。

一方、コンステレーションを読むということは、河合(1993)によると、「私」という人間が現象の外にいて起こっていることどうしの連関、特に因果関係を読みとるということではなく、現象の中に「私」が入っていて、そのうえでその中に何らかの意味を見出すということである。そこには必ず「私」が関わっているのである。

「私」が現象の中にいながら、「私」にとっての意味を見出すという場合、そこには必ず目に見えないもの、わからないものが入ってくる。客観的な神の視点から見るのではなく、あくまで「私」の視点から見ることになるからであるし、そもそも人が生きる上での意味というものは、見えないもの、わからないものを含むことが当然であろう。コンステレーションを読むということは、星の配置に何らかの形を見るような行為ではあるのだが、ただ気まぐれな戯れとしてそうしているわけではなく、人生が意味あるものとしてひとつのまとまった姿を現すか、あるいはまったく無意味なものとしてバラバラに崩壊してしまうか、その瀬戸際において意味を見つけようとしているのである。

そう考えると、コンステレーションを読むということが、背後から来るものの気配を読むこととつながるということも、少し理解できてくる。コンステレーションを読むためには、見えていること、生じたことをもとにするのであるが、同時に見えないものを感じ取り、潜在的な可能性をも視野に入れなければならないのである。

ところで、ブタヤマさんの背後に迫っている巨大な化け物たちはいったい何であろうか。村瀬(2010)は、ブタヤマさんが後ろを振り返るときには何も見えていないことに着目して、『ブタヤマさん』の『後ろ』に現れているモノは、振り向いて見えるような『後ろ』に現れているわけではないことがわかる」(p. 99)と述べている。村瀬によれば、絵本の中で現れる巨大な生物は、その巨大さも含めて「絵」の中に「絵」として突然現れるモノであり、ブタヤマさんの「後ろ」ではなく、絵本そのものの「後ろ」からふいに現れるのである。この「後ろ」とは、二次元の紙にいかにも三次元の生き物の姿が現れるところであり、まさに「絵」のもつ「奥行き」そのもののことである。したがって巨大な生き物たちは、「絵本」を見る読者の「絵」を見ようとする心の中の「ちへいせん＝黄色い大地」からふいに現れるのである。

「ちへいせん＝黄色い大地」というのは、第一作『キャベツくん』から続くこの絵本の絵の基本構図である。「この絵には黄色の『ちへいせん』がある。黄色い大地と薄黄色の空。空と大地を区別しない色使い。全体が黄色い絵本というのが印象の絵本だ」(村瀬, 2010, p. 90)。

このように考えると、この絵本がさらに奥行き深く立ち現れてくる。ブタヤマさんの後ろに描かれるモノたちは、突然現れ、また、生々しく、形容しがたい迫力を持っている。これは何を描いているのだろうかと考えたとき、言葉を知る以前の子どもが世界を捉える世界の姿に近いのではないかとも思われる。本来世界とは、このように突然現れるもの、そして、わけのわからない生命力をそなえたものであるのではないか。

先の対談(鶴見・河合, 1990)で鶴見は、「見えないものは一体どういうふうにして探るか」といって、これは気配なんですね。胎児が腹の中での間は気配だけしか感じない。胎児にとって、あらゆる認識は気配に尽きると思うんですよ。この世に出てきてもまだ気配の感覚があつて、こどもは学校に入るまでは相当、その感覚が発達してる」(『鶴見俊輔全漫画論2』, pp. 446 - 447)と述べている。気配で感じる原初的な世界は、おそらく突然現れ、突然消える。そのような世界は、流動しつづける。ときには、襲いかかってくるようにも感じら

れることもあるだろう。このような世界のありようについては、自閉症の人や統合失調症の人の体験した世界の描写なども連想される。

言葉を覚え、さらには社会や文化で共有されている世界のありようを継続的に学習し、子どもは気配に満ちた本来の世界を忘れていく。言葉やそのような普遍的意識の共有によって、世界はいわゆる人間の世界、目に見えるものが重視される大人の世界となる。そして、我々が現実と呼んでいることは、我々が世界をそのように共有されたものとして、いわば絶え間なく創造することによって成り立っているのだと言える。

ここで、コンステレーションを読むということは、そのように共有され、因果律に支配された巨視的レベルの世界を一度解体する、あるいはそのような世界としていつものように創造することをいったんやめて、原初的な本来の世界に近い状態に戻し、そのうえで新たな結びつきを見出し、世界を再創造すること、あるいは新たに世界と出会い直すこととも言えるのではないだろうか。このように考えると、河合がこの絵本とコンステレーションを読むこととを結びつけたその意味が、さらに奥深いものとして見えてくるように思われる。

3 二人いることの意味

シリーズ第1作、『キャベツくん』は、キャベツくんとブタヤマさんが出会うところから話が始まる。キャベツくんはブタヤマさんにあいさつするが、ブタヤマさんは、「フー」と言って、「あのね、おなかですいてフラフラなんだ。キャベツ、おまえをたべる！」(p.4)と、キャベツくんをつかまえる。キャベツくんは、「ぼくをたべると、キャベツになるよ！」(p.4)と言い、ブタヤマさんは鼻がキャベツになっているブタヤマさんが空に浮かんでい

るのを見て、「ブキャ！」と驚く。「じゃあ、ヘビがきみをたべたら、どうなるんだ？」(p.6)とブタヤマさんが聞くと、「こうなる！」というキャベツくんの声とともに、今度はお団子みたいなキャベツのヘビが空に浮かんで舌をペロペロやっている。以下同様に繰り返され、タヌキ、ゴリラ、カエル、ライオン、ゾウ、ノミ、クジラと、空に浮かんでいく。それらはすべて、どこかがキャベツになっている。

なんともすごい話である。いきなりブタヤマさんがキャベツくんを食べようと、つかまえるのである。ブタがキャベツを食べるのではなく、「ブタヤマさん」が「キャベツくん」を食べようとする話だから、絵本の読み手がギョッとなるのは当たり前なのだと、村瀬(2010)は指摘している。さらに言えば、たとえばトンカツのことを思い浮かべれば、人間はブタとキャベツを一緒に食べることがよくあるのであり、なんとも人を食ったような、怖いような構造がここにはある。

そもそもの人間としての生の始まりを思うと、乳児が母親にミルクを与えられることは、まさに母親の一部を食べる、母親を食べるとも言える体験であろう。また、少し自由に動けるようになった乳児は手に取るものをなんでも口に入れようとする。食べることは、人間にとって世界と関係する最初の仕方なのである。

さらに、原初的には他者を食べるということは、そのままその相手になることや、変身することを意味するかもしれない。生まれたばかりの赤ん坊でも、ごく簡単な手ぶりや顔の表

情を本能的に模倣することが知られており、そこにはミラーニューロンが関わっていると考えられている (Iacoboni, M. , 2008 塩原訳 2009)。母親など周りの他者や世界の動きを乳児は模倣し、すさまじい勢いで取り入れ、変身していく。また、先の河合との対談で鶴見 (1990) は『キャベツくん』について、「食べるというのは一種の変身ですからね。だから、こどもにとってそれは変身として受け取られていると思うんです。こどもはおしっことうんこにものすごい興味を持っていますが、あれは体を通して出てくるんで変身でしょう」(『鶴見俊輔全漫画論 2』, p. 452) と述べている。

大人になっての「他者を食いたい」という欲望は、自分というものの、自我がある程度成立したうえで、やはり何か欠けた存在である人間として必然的に生じるものと言えよう。それは、多種多様な感情とも結びつき、複雑に絡み合い、様々な形をとって表現される。たとえばそれは、他者に対して尊敬や憧れを抱き、その他者と同一化し、その他者の一部を取り入れようとする心の動きとして現れることがある。あるいは、他者から何かを奪い、破壊しつくそうとするということもあろう。また、他者を食いたいという欲望は、性的な欲望とも一体化するであろう。たとえば「大物食い」や「人を食う」などといった表現があるように、人間を食べることはメタファーとしてもよく用いられており、様々な形、様々なレベルで生じるものであると考えられる。

ここで、ブタヤマさんの欲望はどのようなものと考えられるだろうか。原初的な取り入れを志向する子どもっぽさのような側面も感じるし、強い者が弱い者から奪う大人の世界の乱暴で貪欲な欲望にも見える。どこか後ろめたさ、罪悪感をともなう欲望でもあるようである。結局のところ、様々な要素が入り混じったキメラ体なのであり、欲望というものはそもそもそういうものであるかもしれない。絵本の中ではそれは、鼻がキャベツになったブタヤマさんというヘンテコなキメラ体として見事に表現されている。

このようなわけのわからないイメージを、キャベツくんがブタヤマさん本人に見せているということが非常に重要と考える。心理療法において、クライアントがセラピストを理想化し、セラピストと同一化したり、自分のものにしたい、いわば食べたいと願ったりするような場合がある。その際、そのようなクライアントの欲望をクライアント自身が観察し、理解していけるようになることが重要となる。キャベツくんはまさにそのようなことをしているように見える。

キャベツくんを食べたいけれども、食べたらどうなるのか。本当のところはよくわからない。一般に、他者を食いたいという欲望は様々な要素が入り混じっていて、それがもたらす結果も、よくわからないものであろう。様々な要素が混在したキメラ体を、視覚イメージとしてこの絵本は提示する。ついでヘビやタヌキがキャベツくんを食べた結果である混合物、キメラ体も現れ、ブタヤマさんはそのすべてに「ブキャ！」とびっくりする。この「ブキャ！」という叫び声も、実はブタとキャベツの混合物、キメラ体なのではないだろうか。どこまでも遊びの入ったすごい絵本だと感じる。

空に浮かんだ視覚イメージは、キャベツくんと様々な動物の混合物、キメラ体であり、ブタヤマさんを驚かせるいわば化け物である。『ブタヤマさんたらブタヤマさん』ではついに

化け物と出会わなかったブタヤマさんであるが、この絵本では見事に出会いが生じ、ブタヤマさんはひっくり返ってびっくりしている。これがこのお話においてブタヤマさんの相手としてキャベツくんがいて、二人いることの効果であると考ええる。

キャベツくんがいて、キャベツくんを食べようとすることによって、ブタヤマさんは化け物と出会うのである。心理療法で行っていることも、こういうことかもしれない。セラピストという他者がいて、その相手に様々なものを投影することで、クライアントは自身が抱える化け物と出会い、向き合うことになるのである。

たとえば、自分自身で意識されない、化け物とも言えるほどの激しい怒りを抱えているクライアントの場合、セラピストに出会って、セラピストに対する怒りを生じ、それをぶつけることがある。心理療法の関係性はその怒りによって破壊されてしまわずに持ちこたえることができると、クライアントは怒りを自分自身のものとして体験することができ、ここにいたってクライアントは自らの怒りと出会うことができたとと言えるのである。そのように怒りを心の容器に入れることが可能となってくると、それは以前のように破壊的ではなく、コントロール不能な化け物ではなくなってくる。

このお話に戻ると、キャベツくんが「むこうにおいしいレストランがあるから、なにかごちそうしてあげるよ」と二人で歩いていくところでお話は終わりになる。ブタヤマさんはキャベツくんを食べることはできなかったが、そのキャベツくんのレストランでごちそうしてもらうことになるのである。自分を食べようとするブタヤマさんの欲望にそのまま応えることはできないが、ブタヤマさんに自分自身の欲望を視覚イメージとして反省させ、ついには可能な形でケアをする。自分を食べようとした相手に、涼しい顔でごちそうしてあげると言う。コンステレーションを読むということは、こういうことではないかと考える。キャベツくんは「私」が否応なく巻き込まれている状況の中であって、ブタヤマさんの自分を食いたいという欲望にとらわれることなく、全体的状況を把握し、その都度適切に行動しているのである。やはりキャベツくんは、心理療法のすぐれたセラピストに見える。

4 他者を食いたいという欲望

シリーズ第3作、『キャベツくんとブタヤマさん』という作品では、山の中の高いつり橋の上で、キャベツくんとブタヤマさんが出会う。「フー おなかですいて めがまわる。こんな たかいところだから よけいに めがまわる」(p.2) とブタヤマさんはキャベツくんを見てペロリと舌を出す。つり橋の下には大きな川があり、そこに大きなサカナがいて、ブタヤマさんとキャベツくんを食べようとしている。サカナがブワッと水を吹きかけて、ブタヤマさんは「ブキャ!」と悲鳴をあげる。この時、橋の上に大きなヘビがやってきて、二人はヘビの上に乗ってしまう。さらに、大きなムカデがやってきて、ヘビの上に乗ったムカデの上に二人は乗ることになる。次に大きなミミズがやってきて、ヘビ、ムカデ、ミミズの上に二人は乗ることになる。下のサカナが三匹に増えている。さらには、ロールパンみたい

にヘビたちが丸くなり、二人は高い山の上にいるみたいにその上に立つことになる。サカナは四匹になる。さらに大きなアオムシがやってきて、ヘビ、ムカデ、ミミズ、アオムシの上

に二人は乗ることになる。サカナは五匹になる。ブタヤマさんは「もうだめだ。ぼくは キャベツくんを いつも たべたい たべたいと おもっていたんだ。ゆるしてね ゆるしてね」(p. 15)と涙をポロポロ流して言い、キャベツくんは「きにしない きにしない」(p. 16)と言う。つり橋が重さに耐えきれず、川にザブーンと落ちてしまい、皆川に沈んでしまう。川がゴオーゴオーと流れている絵の後、ザアーッとアオムシたちが川から飛び出してくる。ミミズにサカナが食いつき、ムカデにミミズが食いつき、ムカデがヘビに食いつき、ヘビがアオムシに食いつき、皆が一直線に並んだ棒のようになっていて、その上を二人が大急ぎでかけあがって逃げ出す。次の絵では『キャベツくん』の舞台のような広々とした大地に戻っていて、ブタヤマさんが「ああ たすかった たすかった。あんしんしたら おなかぺこぺこで めがまわる。キャベツ おまえをたべる！」(p. 25)とキャベツくんをつかまえる。でも、ブタヤマさんはすぐにフラフラと歩いていき、キャベツくんが「おいしいレストランがあるからごちそうするよ」と言っている声が小さく聞こえてくる、二人が向こうへ小さく遠ざかるシーンで物語は終わる。

このお話でもブタヤマさんはキャベツくんを食べたいと思っている。そして、今回はその欲望自体の、呑み込み、貪り食おうとするような破壊性が見事に表現されていると考える。つり橋の下で二人を食べようとしているサカナは、ブタヤマさんのキャベツくんを食べようとする欲望が外在化し、姿かたちを現したものと考えられるのではないか。まさにブタヤマさんの食べたいという欲望が見事にコンステレートされた状況である。ブタヤマさんは自分自身の欲望に呑み込まれ、食べられそうになっているのだと考えられる。深層心理学の図式で考えると、サカナは下の方にあり、心の深い層、無意識に潜んでいるとも捉えられるが、つり橋の上、二人が立っている地平、すなわち意識領域も無事ではなく、ヘビやムカデに侵入されて、サカナも数が増えていく。ブタヤマさんの欲望は増殖し、領域を拡大して襲ってくる。大ピンチである。

『キャベツくん』において、キャベツくんという相手がいることで、ブタヤマさんは化け物と出会うことができたと言ったが、それは視覚イメージとしてであった。今回はさらに真っ向から、はっきりとした身体的実感をともなって化け物と出会い、下手をすると食べられそうな目にあう。『ブタヤマさんたらブタヤマさん』においては、背後から迫る化け物について気づかなかったブタヤマさんは、今回、正面から手触りのある実体としての化け物に出会うことになったのである。

これは、世界と自己を知り、また、それらと出会うということにおいて、重要なことではないかと考える。世界は自分自身の心の投影を受けて変容する。食べたいという欲望があれば、世界はこちらを食べようとしてくる。心と世界は対応して変容するのである。そのことをこのお話は見せてくれ、実感させてくれる。コンステレーションを読むということは、そのことを知ったうえで、全体的な状況を読みとるということであろう。

ブタヤマさんは自分自身の欲望とその破壊性について、ほとんど思い知らされるような形で知り、いやというほどに体験している。その体験が極限にいたったとき、ブタヤマさんはキャベツくんも含め、他のすべての化け物たちと一緒にいったん川の底に沈むことにな

る。

これはいったん死んで生まれ変わるようなもので、人間的ないらぬ欲望など浄化されるのではないかと思われる。ところが、助かっていつもの広い大地に戻ってきたブタヤマさんは、「ああ たすかった たすかった。あんしんしたら おなかがペコペコで めがまわる。キャベツ おまえをたべる！」(p. 25) とキャベツくんをつかまえるのである。ここでは、人間の欲望の根深さ、人間が抱える業のどうしようもなさのようなものが見事に表現されているように思われる。

しかし、すぐにブタヤマさんはキャベツくんをはなしてフラフラと歩いていく。やはり何かが変わっているのである。このあたりの描写は見事だと感じる。つまり、人間というか、人間のブタヤマさんの欲望はそう簡単になくならないし、劇的に変化はしないけれども、微妙に変わっていくことができる。それは自分と欲望との間に、少し距離ができるような感じであろうか。このような欲望は、なくなりはないけれども、なんとかつきあって共存して生きていくしかないのだろう、と思わされる。

そこで最後にキャベツくんが例のごとくブタヤマさんをおいしいレストランに誘っている。今回のお話では、キャベツくんの名セラピストぶりがさらに際立っていると思われる。ブタヤマさんと一緒に化け物たちに巻き込まれつつ、絵を見て推測するにまったく平気というわけではないだろうに、ついにブタヤマさんがキャベツくんを食べたいと思っている欲望を告白し、謝るところで、「きにしない きにしない」と言っているところなど、むちゃくちゃに肚が座っているし、すごい包容力である。そして、ただ優しいだけではなく、ブタヤマさんと危機をともにくぐり抜け、ついには川の底まで同行し、一緒に戻ってくるのである。心理療法のセラピストとして、このような仕事が出来れば理想的と言えるだろう。

5 増殖する欲望

シリーズ第4作、『キャベツくんのにちようび』では、お決まりのようにブタヤマさんがキャベツくんを食べようとするのであるが、「いらっしやい いらっしやい おいしいものが ありますよー」(p. 3) という大きな三匹の白いネコに誘われて行ってみると、画面を埋めつくすほど広いキャベツ畑が出現する。しかし、すぐにキャベツ畑は消えてしまい、次には画面を埋めつくすほどたくさんの白いネコたちが出現する。ネコたちもすぐに消えてしまい、次には画面を埋めつくすほどたくさんのブタが出現する。ブタたちが消えたあと、キャベツくんが「ブタヤマさんは ブタをたべるの？」(p. 23) と聞くと、ブタヤマさんは「ブタは たべない。トンカツだって たべない」と言う。ネコたちが「いらっしやい いらっしやい おいしいものは ありませーん」(p. 26) と行ってしまうと、キャベツくんが「ぼくのうちで おいしいものを ごちそうしてあげるよ」(p. 27) と言う。

欲望は際限なく増殖していくものでもある。その姿を、今回は白いネコたち、招きネコたちが見せてくれると思われる。招きネコは商売繁盛の象徴であると考えられ、商売は増殖する欲望を原動力として動いていくものであることを思うと、今回のお話にふさわしいキャラクターと言えるのではないか。

食べたいという欲望は、本当は何を欲望しているのだろうか。広大なキャベツ畑の大量のキャベツなど、食べきれないわけでもないけれども、ブタヤマさんはよだれを流してしまう。さらには、大量のネコ、ブタなど、もはや元の姿をとどめないものが出現するわけで、欲望の性質をよく描写していると思う。欲望は限りなく増殖していくと同時に、その対象を次々と変えていくものでもあろう。

最後に出現するのがブタであるのも、しゃれが効いているとも言える一方、怖さも感じさせる。欲望の対象は、究極的には自分自身となり、自分自身を食らうというところが終着点かもしれない。自分の尾を自分で食らうへび、ウロボロスのことが思い浮かぶ。ブタヤマさんは、ブタは食べないと否定し、トンカツも食べないと言うが、これは次作の前振りにもなっているように思われる。

6 昇華される欲望

シリーズ第5作、『つきよのキャベツくん』では、いつものパターンが変わる。キャベツくんが物語の冒頭で出会うのが、ブタヤマさんではなく、トンカツなのである。鼻がついて、チョビ髭まである大きなトンカツなので、キャベツくんは最初ブタヤマさんだと思うのだが、トンカツであり、あたたかくて、とてもいい匂いがするという。「わたしはトンカツであーる」(p. 3) とトンカツが言う。これまでよりさらにむちゃくちゃな話である。そこへブタヤマさんもやってきて、キャベツくんが「ブタヤマさん、ちょっとたべてみたら？」(p. 9) と言うと、ブタヤマさんは震えながら、「トンカツは、ソースがないと だめです」と言う。すると、森の中からトンカツ・ソースが走ってくる。トロトロと、トンカツにソースをかける。キャベツくんも、ブタヤマさんも、トンカツを食べたいけれどもなんだか怖い。このときのブタヤマさんの、「トンカツは、キャベツといっしょにたべると うまいのだ」(p. 17) という言葉に、ここまでのお話で共通のテーマとなっていたキャベツくんを食べたいというブタヤマさんの欲望が表現されていて、やはり、と思わされる。細い月が出てきて、パクリとトンカツを食べてしまう。トンカツを食べた月はまるくなり、静かに登っていった。ブタヤマさんは泣きそうになる。キャベツくんが「どこかで、おいしいものをたべましょう」(p. 27) と言うと、ブタヤマさんが「そうしましょう。そうしましょう」と応じて、仲良く二人が歩いていくシーンでお話は終わる。

このお話では、食べたい対象はなんとトンカツとなっている。ブタヤマさんは前作でブタは食べないし、トンカツも食べないと言っていたが、今回しっかり食べたいと思っている。トンカツは料理である。食べるために人の手が加わったものが、トンカツである。そしてなんと今回、トンカツ・ソースまで登場する。トンカツ・ソースがトンカツにソースをかけて、ますます食欲がそそられることとなる。

一方で、やはりトンカツは、ただのトンカツではない。足があって歩いているし、鼻とチョビ髭までついているし、「わたしはトンカツであーる」と、なんだかえらそうである。だから、ブタヤマさんもキャベツくんも、トンカツを食べたいけれども、なんだか怖いのである。

擬人化というのは、絵本をはじめとする様々なファンタジーの技法であるし、普遍的な心の働きでもある。世界に存在するあらゆるもの、さらには目に見えるものとしては実在しないあらゆる概念について、擬人化は可能である。擬人化すると、その対象と関係を持つことが可能になる。対話することができるようになる。モノがヒトになるのである。そうすることで、世界との対話、交流が生まれ、硬直した心に変容がもたらされる。たとえばユングによる能動的想像法では、夢の登場人物などと対話を行っていく。そうすることで、自分自身の心の要素との交流を生じさせるのである。対話の相手は、心の要素であっても、世界に実在する何かであっても、その交流が意義あるものとなる可能性を持っている点では同じであろう。

今回登場のトンカツは、擬人化されているが、ブタヤマさんやキャベツくんに比べると、ややモノの方に近い存在である。つまり、四つ足で歩いているし、呼称も「さん」や「くん」がついていなくて、トンカツのままである。擬人化の程度、レベルを、微妙に変えているのである。そうして異世界どうしが交わる様子を巧みに描き出していると言える。

モノよりではあっても、トンカツはヒトとしての性質、あるいは他者性を持っていて、ためらいなくトンカツを食べるようには食べることができない。しかもブタヤマさんにとっては、トンカツを食べるということは、ブタがブタを食べることになるという状況である。しかし、やはり食べたいのである。「トンカツは、キャベツといっしょにたべると うまいのだ」などとブタヤマさんが言っていて、ここではトンカツのみならずキャベツくんも食べるモノとしてのキャベツとなっており、対象がヒトとモノの間を揺れ動いていることがわかる。ブタヤマさんとキャベツくんという二人の「登場人物」も、読者の視点に立てば、そろって食べる対象となる瞬間があるかもしれない。世界は流動しつづけているのである。

今回は、なんとキャベツくんまでトンカツを食べたいと思っている。前作まではキャベツくんの欲望というものは一切表現されてこなかった。ブタヤマさんだけではなく、キャベツくんも欲望を抱くこともあることが描かれることで、ブタヤマさんとキャベツくんが同じ地平に立っていること、同じように欠けた存在であることが感じられる。

今回のお話は、ブタヤマさんがキャベツくんを食べたいと思っているお話の流れのなかにありながら、前作までとは構造を異にしている。前作までブタヤマさんがキャベツくんを食べたいと思うという二者関係がベースとなり、そこに第三のモノとして視覚イメージや化け物が登場してきて、それを媒介としてブタヤマさんは自らの欲望という化け物と出会い、それを通してブタヤマさんに少しの変容がおとずれていた。

一方、今回のお話では、ブタヤマさんとキャベツくんがともにトンカツを食べたいと思っている。これまでブタヤマさんだけのものであった欲望が、キャベツくんにも共有されている。そして、欲望の対象はトンカツという、より純粋な食べ物に近く、それゆえ余計にわけのわからない存在となっている。今回、二人を呑み込みかねないようないわゆる化け物的な存在は登場しない。化け物的な存在は、トンカツがそういうものとも言えるが、これは二人を襲うのではなく、逆に二人がこれを食べたいと思っているのである。

そしてついには、月がトンカツを食べてしまう。食べるという行為が実際になされるのは、

全作品を通して実はこれが初めてである。これまで食べたい食べたいと言いながら、ついに食べることはできなかった。食べたいという欲望が、ついにめでたく成就されたのである。しかし、それは月という、二人やその他の化け物たちとは同じ地平にいない、次元の異なる存在によってであった。

本来的に月に欲望は存在しないと考える。トンカツをおいしそうに食べて、まるくなって満月になり、満足そうな月は、わけのわからないものを食らうおそろしい化け物にも見えるが、あくまで自然物であり、すべての出来事は自然な現象であると思わされる。物語の最後は「つきの かがやく よるです」(p. 27) で締めくくられる。

どろどろとしたブタヤマさんの欲望は、自然現象のひとつとして、月が食べることで、月を満ちさせる原動力として、昇華されたのだと考えられる。高次元の存在である月が食べて見せることで、食べるという行為が流動しつづける世界の動きのひとつに高められたのである。本来人間的な欲望というものも、自然現象のひとつであり、そのことを心底自覚できれば、そうした欲望に振り回されたり、呑み込まれたりせずにすむのかもしれない。

このお話を心理療法の過程と捉えるならば、ここにいたって高次元の解決が見られたと言える。ブタヤマさんの欲望を視覚化したり、その欲望に逆に吞まれそうになったり、その欲望の際限のなさを見せられたり、ここまでブタヤマさんの欲望を様々な角度から扱ってきたと言える。キャベツくんという媒介を通して、ブタヤマさんは自らの欲望に向き合うこととなった。しかし、ここにいたって、ブタヤマさんの欲望はまるい美しい月として高い空にのぼっていき、世界を照らす明かりとなったのである。

ここでは、キャベツくんとブタヤマさんは対等の存在になっている。最後のレストランにキャベツくんがブタヤマさんを誘うくだりも、これまでキャベツくんが「ごちそうしてあげる」形であったのが変化して、「どこかで、おいしいものをたべましょう」「そうしましょう。そうしましょう」と、二人が対等なやり取りになっている。心理療法においても、クライエントとセラピストが本当の意味で対等になり、同じように欠けたところのある人間として同じ地平に立つところに到達するということが、理想的な終結であると考えられる。

7 一人でいることの意味

さて、このように『キャベツくん』に始まるキャベツくんとブタヤマさんのお話を並べて見てくると、最初に取り上げた『ブタヤマさんたらブタヤマさん』の見え方も少し変わってくるかもしれない。先には、ブタヤマさんは目の前のチョウにとらわれていて、それゆえ背後の気配に気づかず、危険な状態におちいつている、という河合や鶴見の提示した見方にそって読んだ。ここで、少し突飛ではあるが少し別の見方を提示してみる。

キャベツくんが登場するお話に出てくる化け物は、ブタヤマさんの欲望が外在化したものと読みとることが可能であると思われた。そうすると、『ブタヤマさんたらブタヤマさん』に出てくる化け物たちも、そのようなものと見るができるかもしれない。世界は我々の心を反映しているのであり、主体のありようによって世界の現れ方も異なってくる。そうすると、主体の意志に応じる形で世界が現れてくることもあるわけで、その様相が『ブタヤマ

さんの絵本』全体を通して見事に描かれていると思われる。

ブタヤマさんの背後の化け物たちは、そのほとんどがブタヤマさんに襲いかかろうとしているようにも見える（おしっこをひっかけているだけのセミのような例外もあるけれども）。これは、チョウを追いかけて、つかまえようとしているブタヤマさんと対になっているようにも思われる。つまり、ブタヤマさんはチョウを追いかけて、化け物たちはブタヤマさんを追いかけているのである。

ここには、ブタヤマさんがチョウを追いかけるからこそ、化け物たちが現れて追いかけてくるという構造があるのかもしれない。先述のようにブタヤマさんは目に見える確かなものにあまりにとらわれすぎているために、大切な気配に気づかない、と考えることもできるけれども、一方で、チョウを追いかけるからこそ、化け物たちが現れている、とも見ることができる。つまり、化け物たちに出会うチャンスを得るためには、チョウを追いかけていなければならないのである。

化け物に出会うことは世界と出会うこと、自己と出会うことであり、決して悪いことではない、ということが『キャベツくん』以下のお話で描かれていたように思う。そうすると、チョウを追いかけるブタヤマさんの動きは、目の前の目に見えることにとらわれた残念な大人の妄執とも見える一方で、必要なこと、すなわち、世界と本当の意味で出会うチャンスを創り出す行為とも見ることが可能なのではないだろうか。

ブタヤマさんは「チョウをとるのにむちゅう」であり、チョウに集中している。成瀬(2012)によると、他の煩わしいことは一切考えず、没頭することは「三昧」であり、三昧は「悟り」である。悟りに至るための瞑想は、何かに集中することが第一歩であり、そこから意識の拡大につなげていくという。ブタヤマさんも、見方を変えればチョウに集中することで、瞑想を行っていると捉えることも可能なのではないだろうか。

一点に集中すること、チョウに集中することはあくまで手がかりであり、そこから意識の拡大に至る。背後に化け物たちが迫っているのは、意識が拡大していく途上にあることを意味している。大切なもの、あるいは真理ともいえるべきものは、それをそのまま見据えることができるものではなくて、このように背後から気配としてやってくるのである。ここでは、チョウに集中することによって、通常とは異なる世界との出会いがコンステレートしている、と読みとることが可能なのではないか。

この異なる世界、原初的で本来的な世界との出会いのコンステレーションは他のお話にも共通していて、キャベツくんを媒介としてブタヤマさんはそのような出会いを果たす。しかし、このお話においてブタヤマさんが一人であることも重要と考える。ここで登場する化け物は、多種多様であり、より生き生きと原初的な生命力に満ちているようにも見える。ブタヤマさんへの働きかけ方も、先に襲いかかろうとしているようにも見えると述べたが、それぞれの化け物が思い思いのことをしているようであり、その意図はあいまいで、多義的なものを含んでいるようである。

ブタヤマさんが一人であるからこそ、いわばより純粋な形で原初的な世界がブタヤマさんに近づいているのではないか。キャベツくんという相手がいると、ブタヤマさんの欲望は

キャベツくんを対象として集中し、限定される。しかし、ブタヤマさんが一人でいて、チョウというひらひらと捉えどころのない、多義的なものが対象となると、世界の現れ方もそれに応じて自由になる。

心理療法は二人で行うものであり、クライアントはセラピストを媒介として世界や自己と出会う。しかし、それが成立するためには、一人で世界と向き合うということも必要なのではないだろうか。クライアントとセラピストがそれぞれ一人で世界と向き合う、その時間があるからこそ、二人の時間も生きてくるのではないか。『ブタヤマさんの絵本』でも、『ブタヤマさんたらブタヤマさん』があることで、キャベツくんが登場する他のお話に奥行きが与えられ、より複雑な世界が展開しているようにも思われる。

さて、以上先とずいぶん異なる見方を提示した。これはチョウをどのようなものと捉えるか、あるいはブタヤマさんがどのようなものとしてチョウを追っていると考ええるかによって、見方が大きく異なってくるということではないかと考える。

チョウを実体化し、確かなものとしてブタヤマさんが追っていると考ええると、どうしてもブタヤマさんがチョウにとらわれているように見えることになる。河合(1993)によると、チョウはギリシャ語でプシケであり、「心」でもある。ブタヤマさんはひたすら「心」を追いかける心理学者とも見ることができると言っていて、先の対談(鶴見・河合, 1990)で河合は、「だから、これは心理学者を批判してるという(笑)。心、心と追いかけてるんだけど、心にいちばん大事な気配を無視して、それでこれが心なんだよというようなことばかりいってても…(笑)」(『鶴見俊輔全漫画論2』, pp. 446 - 447)と述べている。

一方、チョウを目に見えてはいるけれども、多層的な現実の顕在化のひとつと捉えていれば、チョウに集中するという行為を通して意識を拡大し、本来的な世界と出会うことへ向かっていっているようにも見える。瞑想で一点に集中するという場合にも、その一点はたとえば目を閉じたときに見える模様、色彩、色を見つけ、それを集中ポイントとして見据えるなど(成瀬, 2012)、集中ポイントは確かに見えてはいるのだけれども、はかなく消え去る一時的なものであることが前提となっている。そのようなものであるからこそ、それは意識の介入、コントロールによって変容するのであり、そのようにして生じる世界と意識の相互作用を見据えていくことが世界を知ることにつながっていくのであろう。

8 結論

以上、『ブタヤマさんの絵本』を題材に、コンステレーションおよび世界や自己との出会いについて、心理療法の視点から考察してきた。シリーズを通して、ブタヤマさんが化け物のような姿をとった原初的な世界と出会うこと、それを通して自己と出会うことがコンステレートされていると考えられた。

ブタヤマさんが化け物と正面から向き合うためには、自らの欲望を投影するための他者であるキャベツくんを必要とするようであった。キャベツくんを食べたいという欲望を通して、『キャベツくん』や『キャベツくんのにちようび』におけるように、ブタヤマさんは自分の欲望の姿かたちや増殖する動きを見ることになり、さらには『キャベツくんとブタヤ

マさん』で自分を食べようとする世界と出会い、最後にブタヤマさんが謝りながら告白した場面に見られるように、キャベツくんをどうしても食べたいと思っている自己と出会い、しっかりと認識したのだった。そしてついに、『つきよのキャベツくん』において、キャベツくんを食べたいというブタヤマさんの欲望は、月という自然現象の一部として昇華されることになり、その体験をブタヤマさんとキャベツくんで分かち合うこととなった。

一方、『ブタヤマさんたらブタヤマさん』ではブタヤマさんが一人でチョウを追っていて、その背後に化け物が迫っている。一人のときと二人のときで、ブタヤマさんが化け物と対峙する仕方が異なることがわかる。一人では、ブタヤマさんはついにこのまま化け物と出会うことにすむのかもしれない。二人いることで、ブタヤマさんは否応なく化け物と出会うこととなった。しかし、一人でチョウを追うブタヤマさんと化け物の関係には多様性があり、無限の可能性が含まれているようにも見える。

一方やはり、我々はチョウを実体化し、それを唯一価値あるものと追い求め、それにとらわれてしまうことになってしまいがちであるとも考える。本論文執筆中に、ロシアによるウクライナ侵攻が始まり、世界規模でブタヤマさんの状況がコンステレートしているのではないかとも思われた。我々がチョウにとらわれ、それを絶対視すればするほど、背後に迫る危険も大きくなるものと思われる。

本来的に我々の内界と外界は明確に分けられるものではなく、両者が入り混じってコンステレートされる。したがって、コンステレーションを読むということも、そのことを前提として読むということであるし、その読むということは即行為することでもある。『ブタヤマさんの絵本』はそのような我々の心のありようや動きを、見事に見せてくれているように思われる。

文献

- 長 新太 1980 キャベツくん 文研出版
長 新太 1986 ブタヤマさんたらブタヤマさん 文研出版
長 新太 1990 キャベツくんとブタヤマさん 文研出版
長 新太 1992 キャベツくんのにちようび 文研出版
長 新太 2003 つきよのキャベツくん 文研出版
イアコボーニ, M. 塩原通緒(訳) 2009 ミラーニューロンの発見 早川書房 (Iacoboni, M. 2008 『*Mirroring People*』)
河合隼雄 1993 物語と人間の科学 岩波書店
村瀬 学 2010 長新太の絵本の不思議な世界—哲学する絵本 晃洋書房
成瀬雅春 2012 悟りのプロセス BAB ジャパン
鶴見俊輔・河合隼雄 1990 「対談 長新太の作品を論ず」『飛ぶ教室 34』 楡出版
(松田哲夫(編) 2018 鶴見俊輔全漫画論 2 筑摩書房 所収)